

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第6号／1987年（昭和62年）2月15日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL0438-62-9121〕 発行人＝石井哲夫／編集人＝友田・明峯・須賀

何のために

品川不二郎

子どもたちに、「何のために勉強するの？」という質問をしてみると、その返答の多くは「よい学校へいくため」とか、「よい会社へはいるため」といったもの。したがって、そのための直接の目標は「高い得点」であり、それは競争のためということになる。

このような子どもたちの目的を是認する親や教師は、高得点をめざし、競争に勝つための「励まし」役を引きうけることになる。その励ましを素直に受け入れてよく勉強する子はよい子とされる。

しかし、その目的を達成した子ども、その目標に到達した時にはどうなるであろうか。一定の得点を取り、合格を手に入れた瞬間に、勉強はおしまいということになる。中学校や高校に合格した子どもたちの心境はこんなところだろう。そこで親や教師は、次の目標を示して油断を警告するのだが、その場合の次の目標もこれまでと同種のものであり、最終目標の「大学受験」をめざして再び偏差値めあての勉強が続けられる。そして最後の山を越えたとき、完全に勉強の目標は消失してしまい、大学のレジャーランド化がはじまる。

このような、現代の日本の教育界の潮流に押し流されながら、これではいけないと思いつつも、この大勢に抗いきれず、やむをえず時流に積極的に乗っていかうとする親や教師があらわれる。そして、その人達は、子どもの勉強だけでなく、大人の労働や勤労の目的についても同じような考え方をもち、経済的目標、金のためだけの努力に終始する人生

態度となりかねない。

日本の高度経済成長は、このような教育観や勤労観によって支えられたのだから、これを肯定せざるをえないといった考え方も生れ、それが日本社会だけで通じている間は、そのような潮流の勢いは阻止できないかもしれない。

しかし、国際社会における、いわば「文化戦争」の時代に突入して、これまでの教育観や勤労観が通用しなくなってきた。もう一度「何のために？」の問いを本質的に究明しなければならぬ緊急の事態に立ちいたっている。

「人間的に、一人一人が成長成熟するために勉強する、仕事する」という目的意識の転換の必要に迫られている「地位・名誉・金・財産・学歴・合格・得点」といった外部的なものをめざして勉強や仕事をするのではなく、もっと大切な人間の心の成長成熟をめざすことこそ、本質的に重要な目標ではあるまいか。

一時、教育界で「ゆとり」が話題になった。そのねらいは、いわば新しい心の育成というねらい、人間的成熟をめざしての試みであったはず。ところが、具体的には国語の時間や英語の授業時間を減らすといった形で提案され実行されたので、そのことに対する反対・批判が渦を巻いた。それでは英語の実力が落ちる。国語の学力が劣るといって大騒ぎ。そこで公立校を避けて私立校へ殺到するといった状況を生んだ。

このような騒ぎは、学校教育においては、
(4頁下段に続く)

以前、中央児童福祉審議会の折に、当時の児童家庭局長、竹内嘉巳氏が「社会福祉施設のオープン化をすすめる」という話をしたことがあった。その時から、社会福祉施設のオープン化とはどういうことかと考えはじめるようになってきた。

社会福祉施設が、対象者を受け入れるということは、家庭に代る生活の場として受け入れるわけである。従って、施設は家庭と同じように外の人が自由に外から覗けるガラス張りの生活ではない。家庭はクローズされた空間なのであり、そこではかなり独得な家風とよばれるものがある。施設にもそこに独得な暮らし方があってよい。だが家庭と施設と異なる点は、施設が社会福祉という公的な性格をもったものであるから単に家庭の父母のように大きな幅をもつ私的な性格を認めるわけにはいかない。これは民間施設と雖も同様であって、公的に承認できる事業内容であるが故に「措置」が行われているわけである。

施設が公的に承認される仕事をを行うということは、一義的には行政機関から監査を受けて監督されるということであろうが、本質的には社会的に承認される存在である。

ることがぞましいのである。しかし、この社会的に承認されるということはむずかしいことで、具体的には、社会福祉事業が社会福祉法人によって運営され、法人は理事会や評議会をその事業主体として機能されるようになっていく。ただ、法人の理事や評議員や監事を社会的に認められる有識者であると言っても、それだけでは不十分であり、施設長や施設職員全員の社会的良識が求められることは当然と言ふべきであろう。だが

に心がけることであろうし、さらに、家庭においてはあまり行われないが、施設の文化的な水準の向上につとめ、その専門性を高め、かつ施設の機能開放を行うことであろう。この中には対象者の家族へのサービスも含まれてくる。とくに、見学者、実習生、研修生の施設来訪を大切に考えることが必要であろう。と、ここまでが、まあ月並みの施設のオープン化論であるが、私には、独自の施設オープン化論がある。それは、施設の

社会福祉施設のオープン化

石井哲夫

それでも施設が狭い職員中心の考えで運営されたのでは、対象者に不利な状況が発生しやすくなるのである。

そこで社会福祉施設が如何にして、積極的なオープン化を行うことができるものであろうか。

一つには、家庭が地域社会と交流して成立しているように、施設も近所づきあいをよくし、商店や工場や病院などの地域の利用機会の活用をよくしていくことで、地域社会からのよい理解を得るよう

積極的なP・Rを行うというものである。

以前よく社会福祉施設の所在地に行くとき町中を一目で施設の人や子どもと思われる集団が散歩をしたり、買物に出かけている姿を見かけた。あれは、あまり感じのよいものではない。悪いP・Rの例である。私が主張したいP・Rは施設生活の楽しさや、働く職員や入所者たちの真剣な暮らし方のP・Rである。私の持論は、社会福祉施設には、人間生活の優れた性質

や、好ましい雰囲気や山秘めているから、それを一般社会に有益に拡めるといふ施設オープン化論なのである。

これは、故糸賀一雄先生の「この子を世の光に」という有名な命題に叶う考え方である、と自認しているものである。

今、我々が実践している「自閉症児治療教育セミナー」や「バザー」や「やきいも販売」「パンの出張販売」のいずれもが、この考え方に基いて行われていると考えて欲しいのである。そして小さな声で自慢したい「私のKちゃんの治療教育」やNHKの発達相談もなかなかよい成果をあげていると思う。そして「山岸君との共著」も今年のビックイベントの一つとなると期待しているのである。

第9回 嬉泉祭りバザー

- ◎日時 3月1日(日)
午前10時～3時
- ◎会場 袖ヶ浦のびろ学園
(内房線長浦駅下車、
送迎バス有り)

施設—地域の相互交流を目指して

—地域活動育成事業の展開

私たちの法人では、東京都の地域活動育成事業の助成を受けて、これまでいろいろな地域活動を行ってきております。この活動は、施設と地域との交流を促進したり、施設機能を地域に開放していくことを通して、福祉の理解を進めてもらおうという趣旨で、毎年すすめてきております。

「高校生のための

社会福祉実践講座」

袖ヶ浦のびろ学園では、今年度全く新しい試みとして、高校生を対象にしたセミナーを始めました。これは、地域の高校生の中に施設を訪問していろいろなお手伝いをしたり、空カン拾いや古切手集めをして募金活動をしているボランティア・グループがあることに目を向け、次代を担う高校生たちに社会福祉の本当のあり方というのはそうした奉仕的な協力もさることながら、障害やハンディキャップを持つ人々と「ともに生きていく」という姿勢がとても大切なのだ、ということは何とか伝えたいと考えたからです。

このセミナーは、袖ヶ浦町を中心に、木更津市・君津市・市原市に所在するいくつかの高校へ呼びかけ、これまでに三回開かれまし

た。また、新聞社が取上げてくれて、遠く千葉市や習志野市からも自発的な高校生の参加がありました。

これまでは、学園の子どもたちの生活やその活動を紹介しながら自閉症のお子さんたちの理解を進めてもらおうとする内容が主でしたが、これからはもっと広範に福祉活動全般を取上げながら、私たちの身近なところに生活している障害やハンディを持つ人々の理解を一層深めながら、地域の中でそうした人々と「ともに生きていく」姿勢の大切さを、若い高校生の方たちと一緒に学んでいきたいと考えております。(森本・友田)

「育児講座

86

めばえ学園では、相談会や講演会などを行い、地域の方々に施設

や処遇についての理解を求めるとともに、専門的なサービスを提供してまいりました。特に、ここ数年は、障害児の相談といった限定されたものから、育児相談や育児についての講演会といった、より一般的な分りやすい題材を選んできております。

今年度は、その流れの中から、育児講座を開催しました。第一回は、教育評論家の品川孝子先生をお招きし、十一月に行いました。

品川先生は、お話しの中で、「子どもにこうなしてほしいと願うなら、モデルが必要です。お母さんは、子どもにとって最高の友達であり、最高のおもちゃです。お母さんにうまくつきあってもらった子どもは、社会に出て、人に信頼感をもっています。お母さん、子どもに『あなたがいてよかった』と伝えて下さい。そして、『いけない』と止めて叱るよりも、どうすればいいかを教えてあげることが大事です。」と、先生の優しい人柄が伝わるような話ぶりで、生き生きとした子どものエピソードを交えながら、話してくださいました。聞いていた我々にも何か心暖まるものを感じさせられました。

次回は、三月九日石井所長を予定しております。(須賀)

セミナーのご案内

治療教育の現場にあって、それに携わる者の量と質の問題、再教育の問題が取り上げられて久しいのですが、今また、その資格の問題とともに、大きくクローズアップされてきております。しかし、たとえ、資格や再教育の場ができたとしても、治療教育に携わる人達が、受身的にそれを受けるだけでなく、自ら研修の場にあっても様々な試みをして、よりよいものを求めていかなければ、何の意味もないでしょう。常に何かを生み出していく姿勢こそが、障害をもつ子どもや大人と関わる上にも、大切なことではないでしょうか。私どもは、今年も様々な形でのセミナーを企画致しました。ぜひ奮って御参加下さい。

一、自閉症児治療教育実践講座

日時 2月13日 15日

会場 袖ヶ浦のびろ学園

二、治療教育夏季セミナー

(治療教育研究会主催)

日時 7月18日 19日

三、自閉症治療教育セミナー

日時 8月17日 19日

嬉泉の新聞第二部

ひかりのタイムス

袖ヶ浦ひかりの学園で生活している人々——彼らが日々の生活の中で、とりわけ社会との接触の中で、何を感じ、何を学んでいっているのか。この『ひかりのタイムス』では彼らの思いを率直に文章にしてもらい、それを原文のまま掲載しています。

「わが人生の師、スーパーの店長サン」

山岸 由多加

昭和六十年秋、施設近辺のスーパーで自家製のパンを、販売する事になった。

私は、そこで、作業をする事になった。

そこで、店長サンと、出逢った。最初の、第一印象は、男っぷりが、よくて、働き盛りの、脂切った、男性、そんな、イメージがした。

私は、この人に、親しみを持った。そして、2人は、親しい友だちになった。

店長サンは、時には、厳しく、忠告もする。(言われる側は、自分でも、思い当るフシが、あるから、認めたくないから、突っ張ってしま

う。

時には、優しく景色を、あげたりする。

この人との、ふれあいを、通して、地域と、つきあっているという事を実感する。

パン販売を、通して、私は、店長サンから、人生を学んだ。

店長サンから、見た私

「俺が、山岸とつきあって、学んだのは障害のある子でも、同じ、人間なんだという事

それと、彼のもっている温かみ、優しさ

彼には、世の中の、しきたり、社会常識を教えていく。それが、俺が、彼に対してやるべき事だ。俺は、ヨイショはしない。ハッキ

り思った事本音を、ピシバシ言う。世の中の、厳しさを、彼にわかってもらうためだ。

俺のように、山岸が、好きだからこそ、手厳しく言う人は、少ないよ。その事を、彼は、わかっているね……。

俺と彼は、冗談飛ばし合う、楽しいつきあいだよ……。

お互い、よき友だちとして、人生を、楽しく生きたいね……。」

私にとって店長、それは、ちょっと年をとったサイコーに、いい男である。

十大ニュース・61年版

伊藤 訓育

- ① 国鉄、分割民営化
- ② サッカーの森孝慈全日本監督 辞任
- ③ 秋元、橋本、中田が相ついでケガ
- ④ 同日選きよで自民党圧勝
- ⑤ 大島・三原山が大ふんか
- ⑥ 住友銀行と平和相互銀行が合併する。新生住友銀行となる。
- ⑦ 女子バレー、ハイマン試合中に急死
- ⑧ 東京サミットがおこなわれる
- ⑨ 三菱銀行有楽町支店から3億円ごうだつされる
- ⑩ 岡田有希子が自殺する

依然として受験勉強・点取り競争こそ教育の使命、勉強の目的と見做されていることの証拠である。わが国の教育界の風潮は依然として「点のための勉強哲学」を堅持しているのだ。

わたしは常に考える。教育は学校だけでおこなわれるのではない。家庭において社会において、学校に劣らず強力にすすめられ実践されているのだと。社会福祉施設は、学校ではないが、社会における広い意味での「真

の教育」、「人間性の教育」がおこなわれている場とってよい。そこにこそ、大きい期待がよせられる。(洗足学園大学教授)

第22回 嬉泉バザー ご報告とお礼

去る昭和61年10月26日に、子どもの生活研究所にて開催いたしました嬉泉バザーで、総額3,494,778円の純益がありました。皆様のご協力とお力添えを心よりお礼申し上げます。